

# 体験版

ショートショート・ライブラリー第3弾  
東日本大震災チャリティー作品

## 夢の続き

※手数料を除いた利益全額を「中央募金会」などを通じて  
寄付させていただきます。

サークル『飛ぶ黒猫』  
渡瀬 由

# 目次

モーニング・コーヒー・・・・・・・・三

八月の魔女・・・・・・・・六

あとがき・・・・・・・・八

## モーニング・コーヒー

朝。駅の周りは通勤や通学の人々でごったがえす時間。人の隙間を縫うように行き交う人の中に、もちろん私もいる。それほど時間に厳格な会社でもないし、もう二、三本遅い電車に乗っても十分間に合うのに、早めに出るクセができてしまっていた。

駅から少し離れた路地。夜は繁華街として有名なその場所も朝という時間では吸血鬼のように眠りについている。そこに目立たないようにして立つ一軒のビルがある。造りは古く、もう数十年経っているだろう、壁のあちこちがひび割れて剥がれ落ち、どこから生えてきたのか蔓が高々と絡み伸びている。

「今日は、開いてるかな？」

ビルの最上階に位置する場所に一軒の喫茶店が入っている。店の名前は『黒猫』ひよんなことからこの店を知り、入るようになった。朝、早めに出てくるのも、この店自慢の珈琲を飲むため。でも、どうやら今日は閉まっているらしい。店の看板には小さくクローズと書かれている。残念と思い、帰ろうとすると、不意に扉が開いた。

「おや、冴子さんじゃないですか」

出てきたのはこの店のマスター。本当の名前は私も聞いたことがないし、本人も自分のことをマスターと呼んでくれと言う。

「あ、おはようございます。今日はおやすみなんですか？」

「ああ。そのつもりだったんだけどね。ちようどよかった、珈琲を飲んでいかにいいかい」

普通なら断るところだけど、マスターにそう言われたら断る人はいないだろう。それくらいこの店の珈琲は美味しいのだ。そして、もうひとつ理由がある。

店の中はしっとりとした薄暗い空間が広がっている。部屋の明かりは全てオイルランプ。椅子やテーブルはすべてアンティークだというこだわりで、とても喫茶店と思えない。それに流れる音楽は決まってモーツァルトか、軽いジャズ・ナンバー。

そして、メニューは珈琲のみ。

「でも、いいんですか」

「実は新しいブレンドを試していたところだね。それで休もうと思ったんだが、いや、ちよつと飲んで貰おうと思ってるね」

マスターはいつもの席へと私を案内する。ビルの最上階ということもあって、この場所からは駅の喧騒が目飛び込んでくる。慌ただしい日常を別の視点からみると、ちよつとした優越感が生まれてくる。でも、それ以上に人間はよく動くな、ということに気付く。そんなに慌てて、一体何をやるんだろうか？

そこに、かつての自分が重なっていく。会社に就職したばかりで、何とか自分の顔を覚えて貰おうと必死になったり、仕事ができるようになりたいと頑張り過

ぎて体調を崩すこともあつて悪循環が続いていた。そんな時、見つけたのがこの店だった。

「冴子ちゃん、これなんだけど」

もう、珈琲のいい香りが広がっている。ちよつと深めにローストしたのだろうか、酸味を感じさせるような、新鮮で力強い香り。

マスターからカップを受け取る。やっぱり最初の一杯は砂糖なしに限る。

「では、いただきます」

あの香りはそのままに、まろやかな口当たりが私を虜にする。その後から小波のように軽い酸味が、風のようにコクが吹く。本当にこれが珈琲なのかと思うくらいに爽やかなものだった。

「どうかね？ 結構、自信作なんだが」

「マスター、とても美味しいです。私、こんな珈琲飲んだの初めてです」

マスターは良かった、という顔をした。でも、ちよつとだけ、寂しい目をしたのは私の気のせいだったのかな。

「マスター、この街って騒がしいですよね」

「そうですね。今はまだ、そういう時代かもしれませんが、時代に流されないもの、というものは必ず残るものです」

「えっ、それはどういうことですか？」

「さて、ね。ああ、冴子さんそろそろ時間じゃないですか？」

腕時計の針が、午前八時を指している。そろそろ出ないとさすがにまずい。

「じゃ、じゃあマスター、私そろそろ行きます。えっと、お金は…」

「お代は結構です。今日は私がお招きしたんですから」

マスターにお札を言い、私は書類の入ったバッグを肩に掛け、階段を駆け下りていく。

見送るマスターの口から呟くように言葉が紡がれる。

「あの方はもう大丈夫のようですね。さて、新しいお客様を迎えなければ」

急いでいたせいか、ちよつと出入り口辺りで一人の女性とぶつかってしまった。

「ごめんさい、ちよつと急いでいたので」

「いえ、私の方こそ。あの、この上って、何かあるんですか？」

私はキョトンとした表情の自分を慌てて直しながら答える。

「最上階にいい喫茶店があるんですよ」

「私も、行ってみようかな」

「是非！」

今日も、慌ただしい喧騒の中を私は歩いている。新しい温泉旅館の企画が通り、仕事に追われながらも、休息は十分に取るようにしていた。心に余裕がなければ、いい仕事、いい人生は送れない、と思えるようになった。

朝、駅から少し入った、静かな路地。ここを通るたびに懐かしい感じがする。

何度も足を運んだ気がするのに、何故かはつきりとは思いつけない。古いビルの階段で、一匹の黒猫が私を優しげに見ているのがとても印象的だった。

## 八月の魔女

引越してきて十年。私がこの町の不思議に気付いたのは、つい最近のことだった。気まぐれに散歩でもしようと朝早く家を出てから二〇分が経つ。以前に町の中を歩いてみた時に感じた違和感。うまく言えないけど「ちぐはぐ」した印象。それを感じたのが七月の末日だった。今回もあえてその日に歩いてみることにしたのだが。この町は都会の雰囲気の色濃く残しながらも、どこか昔の時代から続く神秘的とも言える空気が存在しているように思えて気に入っていた。

緑が映えるこの季節。少し湿ったような風もまだ心地よく歩くにはちょうど良い。散歩中に足を止めたのは、一年前には空き地だったという記憶以外はないけど、そこには年季の入った日本家屋が建っていた。それもつい最近建てられたものじゃない。どうみても三〇年は経っている。

私の頬を撫でる風は涼しく、軽やかだ。湿気を含んだ風もない。周りの空気は静寂に包まれ、どこか時間が止まっているような感覚。

「なんだか、不思議な気分だな」

今までそんな感覚に身を任せたことはない。その場所を去ろうとしても何となく気になって足が動かなかった。

からん、ころん

からん、ころん、カタン

不思議な音が飛び込んでくる。その音は、その家から聞こえてくるようだった。すつ、と風が私の背中を押した。導かれるようにその家へと足を踏み入れる。そこで目に入ったのは、一人穏やかな表情で機織りをしている老婆。

「機織り、ですか？」

「へえ。こんげな所までよく来たなあ」

町中なのに、この世界にいるのは老婆と、私だけに感じる。そつと、お茶を出してくれた老婆が言った。

「昔はこのあたりにも狸や狐がいたもんですよ。今はちよいと外が賑やかになっ  
てしまっただけ。この家に来ることも減ってしまったんですよ」

「そう、なんですか」

辺りを見回す限り、林と竹林が続いている。この家はそんなに大きな庭があったらどうか？

「私も長いことここに住んでるけど、季節の変わり目に『人間』が訪れるのはも

う長いことなかつたねえ」

「それって、どういうことでしょうか」

老婆はにこやかな表情を崩さずのまま、

「さあ、ねえ。季節の変わり目には色々あるもんですよ。さ、そろそろお行きなさいな。迷ってしまいますよ」

老婆の言葉に私は何も言えないままだった。そして、老婆の「竹林を抜けてお行きなさい」という言葉にしたがって道を抜ける。

からん、ころん

からん、ころん、カタン。

一歩ずつ竹林の道を歩く度に、どこか空気が変わっていくような感じがした。爽やかな、軽い風から少し湿った空気が竹林の隙間から流れ込んでくる。風に揺れる竹の心地よい音が消えたと同時に、老婆の機織りの音が消えた。

竹林を抜けた先、そこには普通の住宅街が広がっていた。見覚えのある場所、さつきまで私が立っていた場所だ。振り返った先にあるのは、ただの空き地。

時計の日付が、八月一日を告げていた。

サークル『飛ぶ黒猫』の渡瀬 由です。  
ショートショート集『夢の続き』の体験版を読んで頂きましてありがとうございます。

本編では体験版での二編を含む七編を読むことができます。よろしければこちらもぜひ宜しくお願いいたします。

早いもので、ショートショート集もこれで三作目となりました。今回で一応の目途を付けて、次回は短編を予定しています。

なお、『飛ぶ黒猫』の今までの作品の紹介なども同梱していますので、気になる方は要チェックですよ？

それでは、本編、もしくは別の場所でお逢いしましょう！

渡瀬 由

※SS集『夢の続き』は東日本大震災のチャリティー企画として販売されます。

販売の手数料を除いた利益全額は中央共同募金会や日本赤十字社、支援団体、募金箱などに寄付されます。

作品の掲載終了時期については、一定の目途がつくまでということで特に期間は決めていませんので、販売を続けていく限りは寄付をさせていただきたいと思えます。